

# せながむい

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第三十六号(一日発行)  
平成四年九月一日

## 古平風土物語

高橋源五口

梅野先生は、古平弁コでない聞き慣れないきれいな言葉の、優しそうな先生であった。姿も立派ななかなか良い先生だと思つた。

終わつてから玄関を出たみんなは、とたんにすっかり元気づいて、雪解けのガタガタ、ジャブジャブ道を下駄や足駄履きで、我先にと家に向かって走つて帰つた。ほつとしたせいでもあつたのか。

夕飯どき、今朝取れたてのピカピカ鯨の塩三平汁を食べた。母は「㊦の先生は、兄の嫁さん先生だ。いつもニコニコしていでナ、えちご(越後)の先生の学校(新潟女子師範学校)を出て㊦の嫁さんになって来た、内地の人だ」という。  
長兄(故小野寺地作)は「㊦の

先生は、子どもだちをよくナツガセ、泣ぐ子をタマスにジョンズ(上手)で、唱歌もよく出来るエエ先生だ。女の先生ではないじばんだべ。」と言う。

いつも大きな声で元気のいい刺網船頭さんは、今朝の大漁を祝つて、若い衆たちと「お神酒上げ」をしていた。

「今日の酒アめエなア。鯨は取れ出ス、ゲンゴ(源吾)アエエ先生に当だつたス、めエごどばっかりだなア」

「めエめエ」と、茶わん酒を飲んでいた。

「すたどもナ、ゲンコ。言うごと聞がねばナ、㊦サ走つて行ってナ、嫁さん先生サ言つてけんだ」

「どんだ、エエが、エエが」と

はやしたてる。

\*私は、鯨が大漁だった日の朝(明治四十五年四月二十二日)

明治二十年以来の統計で、最も鯨の漁獲量の多かったのは大正九年で、七万石(五万二千五百石)の漁獲があつた。これは鯨の豊漁時代といわれた大正年間(平均の約二倍にも当たる漁獲量である)。

この年の漁模様や景気の状態を、高野名幸作さんは日記にこう書いている。

▼1月12日 カレイ網が大漁、一そうで百貫から二百貫(三百七十五貫七百五十五貫)も獲れ、浜はカレイ漁で大変な賑いである。東京などへ送っているというが、送り先では安値だという。

▼3月21日 物産商組合連合慰労会があつたが、鯨漁のため出席者が少なく、四十名ぐらい。

▼3月29日 沢江前浜が大漁この日古平では五千石獲れ、合計二万石。ドロノキ共同がサンバで十五、六杯獲つた。

### 史上最高の大漁に沸く浜

## 保津一隻分の鯨を貰う

に生まれて、今年の鯨大漁の日(大正八年四月一日)に、古平小学校に入学したのである。

▼4月9日 鯨大々漁、この日一万石で合計五万石。困の群来村場所も大漁、保津(ほつ舟)で一そう分かれるから鯨を汲みに来いとの話。支店(困支店)と越中屋(幾井さん)の刺網もケラ掛かりだ。

。浜一帯は鯨で大騒ぎである。人手がなくてみんな困っている。

▼4月20日 今日までの鯨漁の合計は七万石余りで、平年の約二倍である。東京の株式は下落している。諸物価も下落しているのので鯨製品も安い。

▼5月19日 このところずっと雨が続けている。粕干しができず町内では一日千円ぐらいの損失とか。粕にウジがわいて投げたところもあるという。

▼6月18日 朝、イワシが浜に上がったというので町中大騒ぎ。鯨製品大暴落でどこも困っている。大漁景気もない。

# 生活の知恵か 弱きもの人間か

■まぶたにできるメツパ（はれもの）の治療法  
 〈その一〉水道など無い時代自分の家の井戸に顔を突き出して、小豆を一粒つまんで患部に当て、その小豆を井戸に落とすと治るとおばあさんから教わった。やらされた私は信じられなかったが：：：

## 故郷の想

湯井 幸平

（その二）ツゲの櫛の背中央を火に当てる温め、まぶたの上を三、四回こする。これを一日何回かくり返す。これは家の母もよくやっていたので、忘れないで覚えておいて。  
 （その三）腰巻（おこし）の端で、チョイチョイと患部を掃くようになさる。これは、故人となつた本間ハルばあちゃんに直接聞いたので、本当の話。  
 おばあちゃんは魚を売りによく浜町へも来た。息子さんが拓銀

古平支店に長く勤めていて、野球などよく一緒にやったことがある。背が高く、男前で頭腦明晰、大変お世話になつた。

■そら手の治療法  
 〈その一〉チンチンとお湯の沸いている鉄びんの、取っ手の間に手首を通せば良くなるという。この話は、水見八郎先輩から聞いたので、信用がおける。実演をして見せてくれたのでこれまた本当の話。  
 〈その二〉紺のかな糸で手首をぐるぐる巻きに縛る。

これも当時の稼ぎ人の言い伝えで、紺色の木綿糸で手首を強く縛るように巻き、適当な時間が経つてからほどくとそら手が治るといふ。なぜ紺の糸なのかわか？ それが解らないが、おもしろい話だよネ。  
 強く抑えて血行を一時止め、その後血流をどつと早める。なる程なる程、ちょうどつまつた下水の掃除を思い出した。血行障害に刺激を与えるということなのか。

■蜂に刺されたときの治療法  
 蜂に刺されたら小便をかけるか、歯くそ（かす）をつける。アンモニヤで中和させることなんでしょうが、ホントかな。

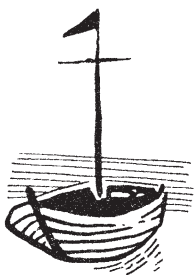
今ではもう誰も信用しないようであるが、われわれ子どもころはよく経験した。刺されたのが顔だったらどうするって：：？  
 ■早く走れるように、すねにタンプの汁を塗る。  
 当時、青年団の陸上競技大会などで、すねにヨードチンキを塗って走る選手がいた。そしてこの青年は、いつも一着でテープを切つた。見ていた子どもたちは、黄色い薬を塗ると早く走れると思つた。それならばというので、タンプの花をこすりつけてるとそんな色になることから、盛んにタンプの花をすねにこすりつけたが、こうすることによつて、何か足がとても軽く感じた。自分に暗示をかけていたのである。そして私もそれを真似て、一着でゴールインした。

それからというものは、走る度にとにかくタンプの花を採つて来て、それを塗って走る習慣がついた。いつごろまでこんな

ことをしていたのか思い出せないが、こんなことを経験したのは、たぶん私ひとりではなかつたようだった。

■イボをとる方法  
 火葬場の人骨でイボが取れるという。あまり気持ちのよい話ではないが、確かにこんな古老の言い伝えがある。人骨でイボをこすると取れるという。漢方では、ハトムギを煎じて飲めば取れると書いてある。  
 ■梅干しの皮で頭痛を治す  
 頭痛がすると、こめかみに梅干しの皮を貼っている人を子どもころよく見たが、私たちは梅干しばあさんといつて、ひやかしたものだ。当時は、万金膏（富山の薬）を貼っていた年寄りをよく見かけた。

★ 当時の民間療法は、まだまだたくさんあった。こんなことも忘れないうちに書き残しておくことが、何かの参考にならうかと思う。



# 随筆

古平 — (十一)

## 親父のこと

古川 義雄



古平の鯨が終わると、親父も祖父も、すぐに樺太だ、千島だカムチャツカだど出稼ぎが続いて、一年のうち、家にいる方が少なかった。

それでも親父が四十歳を過ぎるころまでには、長男の私を頭に七人半の子どもをつくらせていた。「半」というのは、私の出征中に、当時三歳の末弟が築港から落ちて溺死し、そのショックで、母のお腹で成長していた名無しの妹が死産したからである。この不幸な事故の後、さすがに私の弟も妹も増えてはいない。

兄弟が増えていこうちは、親から引っこ抜かれた誰かが、祖母の部屋に移ることになる。そのせいも多く兄弟のうち、私を含めた三人だけが顕著なバ育ちになり、ほかの妹や弟が文句を言うほどの差別ある恩恵に浴した。

黒砂糖の塊は大きかったし、トウキビは太く長かった。親父のデレッキは祖父の懐にいますかぎり届くこともなかった。吉川家のムコである親父と、祖父とはあまり仲の良い間柄ではなかった。第一子の私が生

## 幻に終わった鉄道敷設

### 積丹国道がその夢を実現

積丹半島へ鉄道敷設を(最終回)

昭和二十七年一月の第一回臨時議会で、鉄道敷設や余市・古平間の海岸道路、古平・神恵内間の道路建設問題などについて、町長と議長が今月中旬までに上京し、それぞれ運動をすることが決まったが、都合により伊藤町長と原田副議長が上京した。そしてこの結果は、二月開会さ

れると、祖父母は自分たちが生んだように独占して可愛がったから、反動的に親父のゲンコツは私に向かってくる。親父にしてみれば私を憎いどころか一番可愛かったに違いない。それだから祖父母の目の届かないところでも殴られた覚えはないし、銭湯に連れて行っては玉をみがくように洗ってくれて、帰りには食堂に連れて行って、「うまいか? 帰っても誰サもいくなよ」と、息子と二人で鍋焼きを食うことがサモ大事件のようで、親父の愛情を垣間

れた町議会の席上で、伊藤町長から詳細に説明された、とあるが、道路建設については、具体的に内容を示した記録はあるものの、鉄道敷設については簡単な記録にとどまっている。「代々継続して請願、陳情している鉄道敷設問題については、この度も積丹地方関係町村長が

間見る思いであった。因果は廻るようで、私に長男が生まれたその夜、「俺にも貸せ」と、抱いて寝たきり幾晩も返してくれなかった。呆れるほどの子煩悩ぶりを見せつけられて、私をこうしなかった親父の心情が痛いほど分かった。私が長男を叱ったり、手なんぞ上げようものなら、親父はすぐに私に噛み付いてきた。親父が亡くなってもう十五年私にも孫が八人いるが、子どもたちとは離れて暮らしているのと、ひとりとして抱いて寝たことはない。

連係し、衆議院、参議院その他関係官庁に請願、陳情に努め、ある程度曙光は見えたが、なお前途多難であり、たゆまざる運動が必要であることが強調された。「という記録しかない。大正末から約三十年にわたって夢であった鉄道敷設の問題も、時代の流れと共に次第に風化し町理事者ばかりでなく町民にとっても、その重点は目前の海岸道路の建設へと移っていたのである。列車の本数の少ない田舎の鉄道よりも、今後発展が見込まれる車社会に(次ページへ)



# 二十世紀初めの古平郡

●農業 沖村では土地が狭いため、自家用の菜園を僅かばかり作っているだけであるが、鯨漁に關係して輸送のために馬が七頭飼育されている。

●商業 酒や菓子類の小売り商店が一戸ある。村民の日用品は古平市街に出て買っている。

●木材 薪炭 木材や薪炭の類は、余市や石狩から入って来ている。薪は一敷二円五十銭、木炭は七貫目入り一俵が三十五銭である。

●生活・風俗 村民はことごとく漁業によって生計を立てている。生活に余裕のある者は少ないが、生活に困っている者はない。漁業の資本は、建網業者の二三を除いては、みな他から多少の仕込みを受けている。民情はやや野模（やぼ）であるが、近ごろは節約を尊ぶ風がある。

●教育 本村には、浜中尋常小学校の分校があつて（明治二十四年に分校となる）、訓導（先生）一名がおり、生徒は二、三

十名いる（明治三十六年には六十四名が在籍）。

●衛生 病院は、古平市街に行かなければならない。飲料水は井戸水や、多くは川水を使っているがその水質は良い。

●神社 恵比須神社は、嘉永五年の創立で、明治八年には村社に列せられている。

## 歌 棄 村

●地理 東は沖村に接し、西南には沢江村があり、北は海に面している。地勢は山岳丘陵からなり、土地はやせていて、樹木もまばらである。海岸は山のふもとまで延びていて、石と砂浜になつていて、村の名である「ヨクシユツ」は、砂浜の意味である。古平市街から一里三町（約四キロ）離れているが、交通の便は良い。



## 【7日はこんな日】

### 古平・余市間バス二往復

### 山道を走る改造トラック

[昭和21年]

昭和八年ころには、余市・古平間のバスも一日五回運行していたが、昭和十六年の秋になると戦争によるガソリン使用禁止の命令が出て、バスの運行が出来なくなつてしまった。ガソリン車に代わつて木炭を焚いて走るバスが使われたが、坂道にかかると登る力が弱く、余市間の山

道は無理であつた。美国までの旧道も坂道にかかるにあえぎあえぎ登り、乗客が降りてバスを押し、ようやく坂道を上るという状態だつた。やがて戦争も終わり、僅かながらガソリンも配給になり、昭和二十一年には余市・古平間のバス一往復が復活した。それまで

（前ページより）対応した道路の建設こそが急務である、という現実的な考えがあつたからである。その後、国鉄の赤字線問題が大きな論議を呼ぶようになり、昭和三十五年から赤字線の撤去が始まり、また一方では大きな期待を担つて昭和三十八年二月、青函海底トンネルの起工式が行われるという時代を迎えた。陸の孤島といわれた古平で、百余人の人達が集まり、運動を盛り上げてきた鉄道敷設への夢はついに終わった。鉄道に郷土の発展を賭けた先人の熱情を、これからの町おこしの中で生かしていきたい。

は定期船が唯一の足だっただけにバスの運行は歓迎され、船乗り時間もかかり、料金も高かつたが満員の盛況であつた。そして九月になると、地域の要望から二往復に増便された。古平発が午前十時と午後四時、余市発が午前7時と午後1時となつたが、バスが足りないため、トラックの荷台の両側に板を渡したいすを取り付け、幌をかけた改造車が、一年峠といわれた山道を走り活躍した。